

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：14601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730508

研究課題名(和文) 教室における規範逸脱行動に対する個人要因および状況要因の影響

研究課題名(英文) Effects of individual and situational factors on classroom rule-breaking behavior

研究代表者

出口 拓彦 (DEGUCHI, Takuhiko)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90382465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：コンピュータ・シミュレーションと質問紙調査によって、規範逸脱行動の拡散過程を検討した。その結果、規範逸脱行動が拡散する条件として、以下の3つが挙げられた。「個人要因」と「状況要因」の双方を基にして、個々人が自分の行動を決定すること。「逸脱」の行動基準を持つ者の数が、「遵守」の行動基準を持つ者の数よりも多いこと。規範を逸脱している者の(周囲の学生に対する)影響力が、遵守している者の影響力よりも大きいこと。また、シミュレーションの出力(推定値)と、質問紙で測定された逸脱頻度(実際の値)の間に、正の関連が複数示された。つまり、本シミュレーションは一定の妥当性を持つことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The progression of classroom rule-breaking was investigated via computer simulations and questionnaires. The results showed that three conditions must exist for rule-breaking behaviors to spread: (A) the students base their behaviors on both individual and situational factors, (B) deviant students outnumber the obedient students, and (C) rule-breaking students have a greater influence on their peers than do rule-obeying students. In addition, positive correlations exist between the simulation output (predicted value) and the questionnaire data (measured value) about the frequency of rule-breaking behaviors. These correlations imply that the simulation is a valid measure of this progression.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教育系心理学 規範 シミュレーション ゲーム理論 教室

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 教室における規範逸脱行動

近年、小学校や中学校・高等学校だけでなく、大学においても規範逸脱行動の発生は問題となっている(e.g. 島田, 2002; 卜部・佐々木, 1999)。具体的には、授業中の私語・携帯電話の使用・飲食、出席の代返といった、他者の学習活動や公正な評価を阻害する行為など、様々な規範逸脱行動に焦点が当てられている(e.g. 水野, 1998)。なかでも、授業中の私語に焦点を当てた研究は、多く行われている(e.g. 出口・吉田, 2005; 卜部・佐々木, 1999)。これらの研究では、私語は、個人的には「しないことが望ましい」と思われているにもかかわらず、実際には行われている可能性が示唆されている。したがって、規範逸脱行動が「不適切な行為」であることだけを学生に伝えたとしても、これを減少させることは難しいと考えられる。なぜ、「しないことが望ましい」と考えられている規範逸脱行動が発生するのであろうか。

### (2) 規範逸脱行動の規定因

社会規範を「命令的規範」と「記述的規範」に分類して検討した研究がある(Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991)。前者の「命令的規範」とは「多くの人々が適切・不適切と知覚することに基づく」(北折・吉田, 2000)ものであり、後者の「記述的規範」とは「多くの人々が実際の行動としてとるであろうとの知覚に基づく、行為的な」(北折・吉田, 2000)ものである。そして、この「記述的規範」が、駐輪違反という逸脱行為の一因となっている可能性を示唆する報告がある(北折・吉田, 2000)。私語等の教室における規範逸脱行動も、個々人が持っている規範意識のような「個人要因」だけでなく、記述的規範のような「状況要因」の影響を受けて発生していると考えられる。このような記述的規範の影響について、DSIT(ダイナミック社会的インパクト理論; e.g. Latane, Nowak, & Liu, 1994; Nowak, Szamrej, & Latane, 1990)を基にしたコンピュータ・シミュレーションを使用した研究がなされている(出口, 2007, 2009)。そして、個々人が行った規範逸脱行動が、「記述的規範」的な影響によって、周囲にいる人たちの規範逸脱行動を誘発し、次第に教室中に規範逸脱行動が拡散する現象が見いだされている。

また、『授業中の私語』という社会的に望ましくない行為をすると、『対人関係に対する適応が高まる』という望ましい結果が得られるという、矛盾」(出口・吉田, 2005)も指摘されており、規範逸脱行動をすると個人の適応が阻害されるどころか、逆に適応的な結果が得られる、という可能性も報告されている。このことから、自らの適応を目的として規範逸脱行動を行っている可能性も考えられる。

## 2. 研究の目的

このように、教室における規範逸脱行動は、

「規範意識を持っていても、それが行動に反映されないことがある」「規範から逸脱すると適応が高まることもある」という特徴を持っている。そして、このような規範逸脱行動には、個々人が持つ規範意識という「個人要因」だけでなく、記述的規範のような「状況要因」も影響を及ぼしていると考えられる。

教室という多くの人間が存在する場所において、「個々人の態度や行動が、他者の規範逸脱行動をどのように誘発し、教室に広がっていくのか」という「ミクロ・マクロ間」のダイナミクスについて検討する際に、前述したシミュレーションという手法は、有効なものであると考えられる。そこで、本研究では、ゲーム理論(e.g. Axelrod, 1984)およびDSITを基にしたシミュレーションと質問紙調査によって、「個人要因」と「状況要因」に同時に着目し、規範逸脱行動の発生過程について検討することを目的とした。

具体的には、ゲーム理論における利得行列(自分と他者の行動の組み合わせによる利得を示したもの)を基にして、「規範逸脱行動に対する態度」を測定した。次に、得られたデータを用いて、DSITを基にしたシミュレーションを行い、個々人が持つ態度(個人要因)と記述的規範(状況要因)が、規範逸脱行動に及ぼす効果について検討した。さらに、規範逸脱行動と適応との関係についても分析した。そして、規範逸脱行動に対して否定的な態度を持つ者(規範意識の高い者)であっても、規範逸脱行動に至ってしまう過程等について考察した。

## 3. 研究の方法

### (1) 概要

まず、質問紙調査およびシミュレーション・プログラムの作成・分析を行った。具体的には、ゲーム理論を基に「自分も周囲も遵守(R)」、「自分は遵守、周囲は逸脱(S)」、「自分は逸脱、周囲は遵守(T)」、「自分も周囲も逸脱(P)」という4つの状況に対する態度(満足度)を、大学生ないし中学生を対象とした質問紙調査によって測定した。そして、得られたデータをコンピュータに入力し、個々の学生が持つ態度(個人要因)と記述的規範(状況要因)が、規範逸脱行動に及ぼす影響について分析した。

また、現実場面における規範逸脱行動の頻度や大学生の適応感を質問紙によって測定した。そして、質問紙調査によるデータの分析結果と、シミュレーションの出力を比較し、シミュレーションの妥当性について検討した。さらに、他の発達段階における規範逸脱行動についても検討するため、中学生を対象とした質問紙調査も行った。

最後に、これまでの研究で得られた知見を基に、「規範逸脱行動に関する授業」を作成した。この授業案を大学生および大学院生を対象に実施し、効果測定を行った。

## (2) シミュレーションの詳細

まず、前述の質問紙調査（大学生や中学生を対象としたもの）によって得られたデータ（R, S, T, P の4つの数値）をコンピュータ上の各セルに代入し、DSIT を基にしたセル・オートマトン法によるシミュレーションを行った。セルは、格子状の2次元マトリクスに配置した。「マトリクス」は教室の「座席」と考えた。また、マトリクス上に配置された「セル」は、「学生」（ないし「生徒」とみなした。各セルは、（規範）「遵守」「逸脱」という2つの状態のうち、いずれか1つの状態を持つ。そして、近傍（例えば「自分の周囲にある上下左右+斜めの8セル」）にあるセルの状態（「遵守」状態か「逸脱」状態か）と、代入されたデータにしたがって、自己の状態を変容させていく。

なお、規範逸脱行動を行うか否かを判断する際、自分の規範逸脱行動に対する態度を必ずしも反映させるとは限らない（例：自分では逸脱行動をした方が満足と考えていても、周囲の学生が全員規範を遵守している場合、周囲に合わせて、自分も規範を遵守する可能性がある）と考えられた（e.g. Deguchi, in press）。このため、「自分の態度（個人要因）を反映させる確率」を表す数値として、「M-prob」を設定した。

M-prob が高くなるほど、各セルは、自分の態度にそった行動（「個人要因」を反映させた行動）をとろうとする。逆に、M-prob が低くなるほど、周囲のセルと同じ行動（「状況要因」を反映させた行動）をとろうとする。具体的には、M-prob が1.00の場合、常に自分の態度にしたがって行動する。一方、M-prob が0の場合、自分の態度を行動に一切反映させず、常に周囲と同じ行動をとる（周囲に「遵守」と「逸脱」のセルが両方存在する場合は、多数派に合わせる。同数の場合は、現在の自分の状態を維持する）。M-prob を.3とした場合は、基本的には周囲と同じ行動をするが、30%の確率で自分の態度にしたがって行動する。すなわち、自分の態度（個人要因）と周囲の状況（状況要因）の双方にしたがって、自分の行動を決定する。このM-probの値を.00~1.00まで変化させることで、個人要因と状況要因という2つの要因が、規範逸脱行動の拡散過程に及ぼす影響について検討した。

このような方法で、個々人の「規範逸脱行動に対する態度」というミクロな要因が、周囲の人々との対人的な相互作用を通して、教室全体というマクロなレベルに影響を及ぼしていく過程を分析した（より詳細なシミュレーションの規則等については、Deguchi(in press)を参照）。また、質問紙データを用いたシミュレーションだけでなく、実験的に作成したデータを用いたシミュレーションも併せて実施した。これは、実験的にデータを作成することで、現実場面ではまれにしか存在しないような状況における規範逸脱行動の拡散過程についても分析するためである。

シミュレーションの具体例を図1に示した（出口(2013d)を基に作成。M-prob = .50に設

定）。図中の明るい点は「逸脱」状態のセルを表している。教室の右上部分において、規範逸脱行動が徐々に拡散していく様子が見取れる。

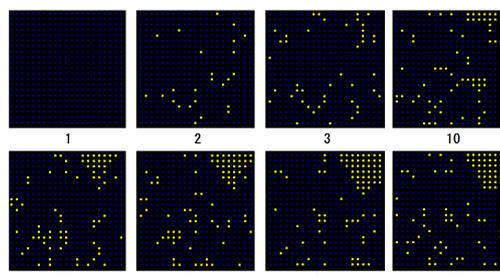


図1 拡散過程のシミュレーション例

## 4. 研究成果

### (1) 個人要因と状況要因の影響

M-prob の大小と、シミュレーションによって出力された逸脱率（マトリクス上における「逸脱」状態セルの比率。高いほど逸脱行動が頻繁に発生しないし広く拡散したことを意味する）の関係を分析した（図2に行動基準別の分析結果を例示。「行動基準」について後述）。その結果、M-prob と逸脱率の関係は、以下の3つのタイプに大別されることが示された（e.g. 出口, 2010a, 2010b）。「パターンA」: M-probの上昇と共に、逸脱率が直線的に増加する。

「パターンB」: 最初はM-probの上昇と共に逸脱率も増加するが、次第に変化の度合いが緩やかになる。「パターンC」: 最初はM-probの上昇と共に逸脱率も増加するが、次第に増加の度合いが緩やかになり、その後は、M-probが上昇するにつれて逸脱率は減少する。

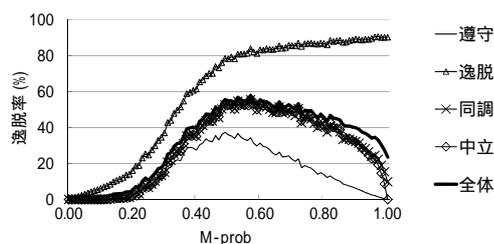


図2 逸脱率とM-probの関連（出口(2012b)による）

パターンCという関係が示されたことから、教室において規範逸脱行動が拡散するためには、「自分の態度（個人要因）と周囲の人々の行動（状況要因）の双方を用いて、自分の行動を決定すること」が、重要な要因となっている可能性が示唆された。また、パターンCについては、M-probがある値を超えると、逸脱率が急激に上昇する「閾値」のようなものも示された。閾値部分では、（規範）「逸脱」という方向の記述的規範が形成され、急激に逸脱率が上昇したと考えられる。

さらに、実験的に作成されたデータを用いたシミュレーションも実施した（e.g. Deguchi, in press）。このシミュレーションでは、「遵守」「逸脱」「同調」「反対」という、4つの行動

基準に分類される利得行列を実験的に作成した。行動基準の詳細は、以下の通りである（行動基準の説明は出口(2011c)より引用）。「遵守」周囲の人たちがその行為をしていても、していなくても、自分はしない（「 $R>T$  and  $S>P$ 」）。「逸脱」周囲の人たちがその行為をしていても、していなくても、自分はする（「 $R<T$  and  $S<P$ 」）。「同調」周囲の人たちがその行為をしていれば、自分もする。周囲の人たちがしていなければ、自分もしない（「 $R>T$  and  $S<P$ 」）。「反対」周囲の人たちがその行為をしていれば、自分はずる（「 $R<T$  and  $S>P$ 」）。

なお、「規範逸脱行動をすること」は、「規範を守ること」よりも目立つ行為であると考えられる（特に「私語」など、音声的な要素を含む行動の場合）。このため、「『逸脱』状態にあるセルは、『遵守』状態にあるセルの1.5倍の影響力を持つ」という設定のシミュレーションも併せて実施した。

その結果、規範逸脱行動が拡散する条件として、以下の3つが示唆された(Deguchi, in press)。「個人要因」と「状況要因」の双方を基にして、個々人が自分の行動を決定すること、「逸脱」の行動基準を持つ者の数が、「遵守」の行動基準を持つ者の数よりも多いこと。規範を逸脱している者の影響力が、遵守している者の影響力よりも大きいこと。（なお、上の条件のうち、いずれか1つが満たされればよいのではなく、やが満たされても、が満たされないと、規範逸脱行動は必ずしも拡散するとは限らない。）

## (2) シミュレーションのバリエーション

シミュレーションのモデルに様々なバリエーションをもたせ、分析結果に相違が生じるか否かについて検討した。この際、シミュレーションのモデルによる影響のみを分析するために、質問紙で測定されたデータは使用せず、「全てのセルが等しく『逸脱』の態度（利得行列）をもっている」設定にした。

モデルのバリエーションとしては、まず、学生・生徒を表すセルだけでなく、「教員」を表すセルを導入し、様々なルートで机間巡視を行った場合について検討した。その結果、教室を前後に机間巡視することで、規範逸脱行動の拡散を抑制させることが示唆された（出口, 2013b）。

次に、「参照可能なセルの位置」を変化させた。いわゆる「内職」等については、（私語のような音を伴う行為とは異なり、）基本的には視覚によって、周囲の人たちの状況を知覚していると考えられる。したがって、自分の後ろに位置しているセルは、前方に位置しているセルに比べて、大きな影響力を持たない可能性がある。そこで、「自分の後ろに位置するセルの影響は受けない」という規則によるシミュレーションを実施した。その結果、教員に関する設定（机間巡視のルートなど）の影

響が、全方位のセルを考慮した場合とは異なる可能性が示唆された（出口, 2013a）。

さらに、他の DSIT のモデルを使用したシミュレーションについても検討した。DSIT には、これまでにベースとしていた「累積的影響モデル」(Latane et al., 1994)の他に、「派閥サイズモデル」(Nowak et al., 1990)というものが存在する。派閥サイズモデルでは、「少数派の盛り返し現象」(高木, 2000)という、独特の現象が生じることが知られている。そこで、派閥サイズモデルを用いたシミュレーションも実施した（出口, 2011a, 2012a）。分析結果の一部は、累積的影響モデルと類似したものであったが、派閥サイズモデルでは、 $N$ -prob(質問紙データを使用したシミュレーションにおける  $M$ -prob に相当する値)と逸脱率の関連が、比較的複雑なものとなる可能性も示された（出口, 2011a）。

## (3) シミュレーションの妥当性

シミュレーションによって計算された規範逸脱行動の頻度と、質問紙調査によって測定された規範逸脱行動の頻度の関連について分析した。まず、1つの中学校12学級の生徒（450名）を対象に、質問紙調査を実施した。次に、質問紙で得られたデータを用いたシミュレーションを学級ごとに行い、規範逸脱行動の頻度を出力させた。また、同じく学級ごとに、質問紙で測定された逸脱頻度の平均値を算出した。そして、両者の関連について相関分析によって検討した。

その結果、シミュレーションの出力（推定値）と、質問紙によって測定された逸脱頻度（実際の値）の間の一部に、正の関連が示された（出口, 2013d）。このことから、本研究で用いられたシミュレーションのモデルは、一定の妥当性を有することが示唆された。

## (4) 行動基準の分類方法の妥当性

質問紙で得られたデータのみを使用して、データの分析を行った。調査対象者は大学生（270名（出口, 2011c）334名（出口, 2014））であった。まず、規範逸脱行動に対する態度( $R$ ,  $S$ ,  $T$ ,  $P$ )に関する4つの値を基に、調査対象者の持つ利得行列を5つの行動基準に分類した。これは、前述の Deguchi (in press)による4つの行動基準の分類方法を拡張したものであり（「中立」を追加し、さらに「遵守」と「逸脱」の分類方法を一部変更）その詳細は、以下の通りである（出口, 2011c, 2013e; Deguchi, 2013; 行動基準の説明は出口(2011c)より引用）。

「遵守」(「 $R>T$  and  $S>P$ 」, 「 $R=T$  and  $S>P$ 」, 「 $R>T$  and  $S=P$ 」)。「逸脱」(「 $R<T$  and  $S<P$ 」, 「 $R=T$  and  $S<P$ 」, 「 $R<T$  and  $S=P$ 」)。「同調」(「 $R>T$  and  $S<P$ 」)。「反対」(「 $R<T$  and  $S>P$ 」)。

「中立」周囲の人たちがその行為をしている、していない、ということは気にしない。自分はするときはするし、しないときはしない。（「 $R=T$  and  $S=P$ 」）（なお、「中立」については、研究によっては「自己」という表記を用いたもの

もあるが、本報告書では「中立」に統一した。）

その結果、全般的な傾向としては、「遵守」の行動基準を持った者の逸脱頻度は低く、「逸脱」は最も高く、「同調」「中立」は、「遵守」と「逸脱」の間であった(出口, 2011c, 2014)。すなわち、理論的に予想される大小関係に沿った形となった。さらに、中学生(男子 217 名、女子 218、不明 5 名)を調査対象とした場合も、ほぼ同様の結果が示された(出口, 2013e)。このことから、上記の分類方法は妥当性を有していると考えられる。

#### (5) 規範逸脱行動と適応

前述の質問紙調査によって測定されたデータを基に、行動基準と、一緒に授業を受けている友人の数の関連について検討した。その結果、「私語」等に関しては、行動基準によって友人の数に違いが見られ、「中立」の行動基準を持つ者は、比較的友人の数が多い傾向にあった(出口, 2014)。

さらに、10月と12月の2回、大学生を対象とした縦断的な測定(10月のデータについては、出口(2011b, 2011c)等と同様)も行い、規範逸脱行動の頻度と適応感の関連について分析した。その結果、「メール」や「授業と無関係の私語」については、その頻度と「対人関係に対する適応感」の間に正の関連が示された(出口, 2012c)。これは、私語に適応的な側面があることを指摘した研究(出口・吉田, 2005)と一致するものであった。

なお、質問紙データ(R, S, T, P)の値を用いて、セルの適応に関する値をシミュレーションによって算出することも可能である(e.g. Deguchi, in press)。現在、適応に関する値を、シミュレーションの際に試行的に出力させており、より適切な算出法を検討している。

#### (6) 「規範逸脱行動に関する授業」

これまでの研究で得られた知見をふまえ、大学生および大学院生を対象に、規範逸脱行動に関する授業を行った(最終年度の2013年度に実施)。授業では、本研究で用いられたシミュレーションを行うプログラムも教材として利用した。このプログラムは、規範逸脱行動の拡散過程を可視化できる。このため、教室内に規範逸脱行動が拡散していく様子について、学習者自身のデータを使用したシミュレーションを通して、視覚的に疑似体験する活動も取り入れた。

授業の前後には、授業を受けた学生を対象とした質問紙調査によって、規範逸脱行動に対する態度等を測定した。当該データについては現在分析中であり、分析結果に基づいて授業案を改善していく予定である。

#### (7) まとめ

規範逸脱行動が拡散する条件として、以下の3つが挙げられた。「個人要因」と「状況要因」の双方を基にして、個々人が自分の行動を決定すること、「逸脱」の行動基準

を持つ者の数が、「遵守」の行動基準を持つ者の数よりも多いこと。規範を逸脱している者の影響力が、遵守している者の影響力より大きいこと。

また、シミュレーションの出力(予測値)と質問紙によって測定された逸脱頻度(実測値)の間には正の関連が複数示された。このことから、本シミュレーションは、一定の妥当性を持つことが示唆された。

さらに、規範逸脱行動に対する個々人の態度を、行動基準(「遵守」「逸脱」「同調」など)に分類する方法の妥当性についても検討した。具体的には、質問紙調査によって得られたデータを基に、個々人が持つ行動基準と逸脱行動の関連について分析した。その結果、全般的な傾向としては、「遵守」の行動基準を持った者の逸脱頻度は低く、「逸脱」は最も高く、「同調」「中立」は、「遵守」と「逸脱」の間であった。つまり、理論的に予想される大小関係に沿った形となり、この分類方法には妥当性があることが示唆された。

#### - 引用文献 -

- (「5. 主な発表論文等」に掲載のもの以外)
- Axelrod, R. (1984). *The Evolution of Cooperation*. New York: Basic Books. (松田裕之(訳) (1998). つきあい方の科学: バクテリアから国際関係まで ミネルヴァ書房)
- Cialdini, R.B., Kallgen, C.A., & Reno, R.R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In Zanna, M.P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 24. New York: Academic Press. pp. 201-234.
- 出口拓彦 (2007). 私語に対する個人の態度が教室全体に及ぼす影響: なぜ「してはいけない」と考えられている私語が広がるのか 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会発表論文集, 14-17.
- 出口拓彦 (2009). 教室における私語発生過程のセル・オートマトン法によるシミュレーション教育実践総合センター研究紀要, **18**, 117-124.
- 出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連: 大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, **21**, 160-169.
- 北折光隆・吉田俊和 (2000). 違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動に及ぼす影響: 大学構内の駐輪違反に関するフィールド実験 実験社会心理学研究, **40**, 28-37.
- Latane, B., Nowak, A., & Liu, J.H. (1994). Measuring emergent social phenomena: Dynamism, polarization, and clustering as order parameters of social systems. *Behavioral Science*, **39**, 1-24.
- 水野邦夫 (1998). 授業規範の構造及びその違反に対する許容度について 聖泉論叢, **6**, 89-102.
- Nowak, A., Szamrej, J., & Latane, B. (1990). From private attitude to public opinion: A

dynamic theory of social impact  
*Psychological Review*, **97**, 362-376.

島田博司 (2002). 私語への教育指導：大学授業の生態誌 2 玉川大学出版部

高木英至 (2000). Social Impact シミュレーションのタネと仕掛け 日本グループ・ダイナミックス学会第 49 回大会発表論文集, 62-63.

卜部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究：リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, **47**, 283-292.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Deguchi, T. (in press). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review*. (査読あり)

(Prepublished on November 24, 2013, DOI:10.1177/0894439313511186)

出口拓彦 (2014). 規範逸脱行動に対する行動基準と態度 教育実践開発研究センター研究紀要, **23**, 81-88. (学内査読あり)

(<http://www.nara-edu.ac.jp/CERT/bulletin2014/CERD2014-R18.pdf>)

出口拓彦 (2013a). 教室における規範逸脱行動のシミュレーション：自分の後方にいる学生の状態を参照しない場合 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), **62**, 49-57. (学内査読あり)

<http://hdl.handle.net/10105/9795>

出口拓彦 (2013b). 教員の机間巡視ルートおよび教室の形状が規範逸脱行動に及ぼす影響 教育実践開発研究センター研究紀要, **22**, 67-75. (学内査読あり)

<http://hdl.handle.net/10105/9301>

出口拓彦 (2012a). 教員および仲間集団が教室における規範逸脱行動に及ぼす影響：派閥サイズモデルによるシミュレーション 教育実践開発研究センター研究紀要, **21**, 65-73. (学内査読あり)

<http://hdl.handle.net/10105/8420>

出口拓彦 (2011a). 教室における規範逸脱行動の派閥サイズモデルを用いたシミュレーション 教育実践総合センター研究紀要, **20**, 121-128. (学内査読あり)

<http://hdl.handle.net/10105/5949>

[学会発表](計 2 件)

出口拓彦 (2013c). 中学生における規範逸脱行動と適応感の関連 日本社会心理学会第 54 回大会 (2013/11/02, 沖縄国際大学(沖縄))

出口拓彦 (2013d). 教室における規範逸脱行動拡散の過程：質問紙調査とシミュレーションによる検討 日本心理学会

第 77 回大会 (2013/09/20, 札幌)

出口拓彦 (2013e). 規範逸脱傾向のある生徒は学級内の逸脱行動を増加させるのか 日本教育心理学会第 55 回総会 (2013/08/17, 法政大学(東京))

Deguchi, T. (2013). *Classroom rule-breaking behaviors and adjustment to campus life*. The 13th European Congress of Psychology. (2013/07/12, Stockholm, Sweden).

出口拓彦 (2012b). 教室における規範逸脱行動に対する縦断的検討 日本教育心理学会第 54 回総会 (2012/11/25, 琉球大学(沖縄))

出口拓彦 (2012c). 教室での規範逸脱行動と適応感の関連：縦断的データによる検討 日本社会心理学会第 53 回大会 (2012/11/18, つくば国際会議場(茨城))

出口拓彦 (2012d). 規範逸脱行動に関する行動基準と逸脱頻度および適応との関連：教室内の対人関係に着目した検討 日本心理学会第 76 回大会 (2012/09/13, 専修大学(東京))

出口拓彦 (2011b). 規範逸脱行動に対する規範意識・態度と逸脱頻度の関連：自己と友人の関係に着目した検討 日本心理学会第 75 回大会 (2011/09/16, 日本大学(東京))

出口拓彦 (2011c). 規範逸脱に対する行動基準と行動頻度の関連 日本教育心理学会第 53 回総会 (2011/07/24, 北翔大学(北海道))

Deguchi, T. (2011d). *Effects of principles guiding behaviour on spread of rule-breaking behaviours in the classroom*. The 12th European Congress of Psychology. (2011/07/05, Istanbul, Turkey).

出口拓彦 (2010a). 教室内の規範逸脱行動に対する態度の分布と逸脱率の関連：質問紙調査とセル・オートマトン法による検討 日本心理学会第 74 回大会 (2010/09/20, 大阪大学(大阪))

出口拓彦 (2010b). 規範逸脱行動に対する態度の分布と逸脱率の関連：教室における規範逸脱行動のセル・オートマトン法による検討 日本教育心理学会第 52 回総会 (2010/08/27, 早稲田大学(東京))

## 6. 研究組織

研究代表者

出口 拓彦 (DEGUCHI, Takuhiko)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90382465